

穂積 信夫

今回は十二人の建築家の方々をご参加くださり、作品をご提示されました。この熱意が建築家協会の支えになっていることを思い、厚く御礼申し上げます。そのなかからただひとりの方にきめるのは心苦しいことではありますが、多くの優れた作品を創られた方々の中から、私の判断で木村博昭氏を選びました。審査の対象になりましたのは、大阪の東淀川区にある〈鉄の民家と茶室〉と、西宮にある〈3 in 1 House〉ですが、どちらも鉄を主題にした作品です。鉄は17世紀後半に鑄鉄の橋に登場してから、建築の形にも影響を与えていたのですが、近代になると、構造の目覚ましい発展はありましたが、目に触れ手で触る部屋のたたずまいからは遠ざかっていました。この鉄の性質と質感で空間そのものを創り出そうという、その目のつけどころは秀逸です。〈鉄の民家と茶室〉では、75年も歳経た民家に、今到着した客車のような鉄の箱が寄り添っています。旧家と新屋が寄り添う間合いには、一筋の光天井が壁の鉄板をほの暗く照らしています。表面は仕上げをしない黒皮鉄板で、やがて変化してくる鉄錆びの色が、古びた柱梁の味わいとなじむのが期待されています。この鉄板は、門型のリブに溶接されているところは船や車両と同じで、鉄の板が自立しているわけではありません。ところが、離れの茶室は、9ミリの板だけで自立した小箱で、鉄工所で作ったものを現場に据えつけたのです。リブに頼らず、包み紙のように考える。これがたどりつく先と思われまふ。包む、という考えを進めて、柱梁の空間格子では想像するのが難しかった、モノコックの領域で、新しいかたちを創り出すことに作者は努力を続けています。〈3 in 1 House〉は、斜面に半分埋め込まれたコンクリートの二世帯住居の上に、風をはらんだ帆掛け舟のような鉄板の、もうひとつの家が乗っています。この室内は壁天井の区別のない空間で、包みこまれたような一体感の中に、中二階が大きな家具のように扱われています。壁際に置かれた寝台は、湾曲した壁に包まれて、船のキャビンのような風情があります。外から見ると、丸みと折れ線で、モノコックの形の面白さが良く出ています。現場に運び込まれたときは、黒皮皮膜のまま、鉄の迫力があつたそうです。これでは強すぎると思ったのか、錆びや断熱のこともあつて、白い塗装がしてあります。ただ、白く塗ったので鉄の質感は減殺されています。鉄に惚れ込んだのならその表情を愛さなくては意味がありません。耐候性鋼板が高いので軟鉄を使うとしても、鉄の質感が消えてしまうのは残念です。あらゆる手で弱点を補いながらもその本性を見せたいものです。錆びもよしとするくらいの覚悟があるので、この方向で進むときの最大の難関がそこにあります。鉄の性質を生かした空間はどうあるべきか。年とともに老いる素材の質感を出してしみじみするような美しい建築を創り出すことが目標になるのでしょうか。作者は7年前から8作品でこの試みを問い続けています。そのなかの近作がこのふたつの家なのです。自分がこれときめた素材の本質に迫る、こうした努力をたゆみなくつづければ、紆余曲折のすえに、新たな地平を切り拓くことになるでしょう。鉄の性質と質感に情熱をかけた建築家の手から、品格のある建築が生まれつつあるのを見て、第八回関西建築家大賞をさしあげたいと思います。